

## 簡易容器を使用したオニバスの発芽観察

久米 修

オニバスの発芽状況については、浜島(1979)、大滝(1982)により平易な解説がなされている。筆者は、この発芽の様子を直接目にしたいものと思い、小型のガラス容器に種子を入れ観察を行ったので、この間の状況を報告したい。

使用したガラス容器は、縦横15cm、深さ22cmの乾し海苔の入っていた空容器である。置き場所は、筆者の住んでいる高松市内の鉄筋コンクリート製アパートの3階、南東向きのベランダで、遮蔽物がほとんど無いため、年間を通し、一日中日当り良好の状態にある。ガラス容器には、培養土の類は何も入れず、オニバスの種子だけがそのまま転がっている状態にした。水は、常時7分目から満水を保つ様に補給した。ガラス壁には、やがて緑藻類が付着し、水も緑色に変わって来たが、そのままの状態で栽培を続けた。水温は測定しなかったが、夏場にはコンクリートの照り返しもあるため、相当高温になるものと思われる。

## 観 察 記 録

1983. 9.18 「仁池」(No.8)産オニバスの内から2個の漿果を採取。これより大型の種子35個を得る。
- 9.19 付着している仮種皮を取り除き種子だけとして、ガラス容器で栽培を開始する。
1984. 6.10 1個発芽しているのを発見。ほこ形葉、矢尻形葉各1枚と心形のスイレン葉状の初期葉2枚が出ており、心形葉の内1枚は水面に浮かんでいる。紅紫色を帯びた根は、ガラス容器の底を這い廻っている。この株は、取り出して標本を作成した。
1985. 5. 3 1個の種子から第1葉に当る針状葉が1cmほど出ているのを発見。短い幼根も見える。
5. 6 第2葉の矢尻形葉が出る。
- 5.17 第3葉は心形葉が出る。
- 5.28 第3葉の葉柄が伸び水面に浮いている。第4葉の心形葉が出ている。
- 5.31 別に新しくもう1個発芽している。第1葉の針状葉と短いながら矢尻形の第2・3葉が

表1. オニバス種子の観察経過

年	発芽種子数	腐敗種子数	休眠種子数
1984	1(2.9)		34(97.1)
1985	2(5.7)		32(91.4)
1986		3(8.5)	29(82.9)
1987		1(2.9)	28(80.0)
合計	3(8.6)	4(11.4)	

( )内は全種子数35個に対するパーセント

見える。根部は全く出ていない。

- 6.12 1番目の発芽株はその後葉が出て来ない。  
2番目の発芽株は腐ったのか見えなくなる。
- 6.30 1番目の発芽株も腐ったのか見えなくなる。  
この時期の水質は、清潔に保つ必要があるのかもしれない。

1986. 2. 1 水を補給する際、残りの種子の状態を調べる。種子の内3個の胚座痕あるいは発芽孔当たりが白く盛り上がっており、内1個は乳白色の内容物が流出している。
- 1987.10. 4 昨年、本年と発芽は見られなかった。全ての種子を切断して、種子の状態を調べる。34個の種子の内、5個は種子内が空っぽで、1個は内容物が溶けて乳白色に腐っていた。28個は、外胚乳も内胚乳も新鮮で生き生きとしており、全く健全であることがうかがわれた。

以上の観察の経過を表1にとりまとめて示した。

今回の栽培条件は、オニバスにとって、自生地の自然環境条件に比べれば、かなり劣悪な厳しい環境下にあったと思われる。従って、この結果を直に自然状態のものとして扱う事は出来ないが、この様な栽培条件下でも、大多数の種子が健全で、休眠していることがわかった。同時に、オニバスの発芽初期の観察には、大型の水槽でなくても、簡易な小型容器で十分発芽して来る事も知ることが出来た。今後は、同じ方法で、どこまで休眠を続けるものか、もっと長い時間をかけて試してみたいと思っている。